



講演会趣旨

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学女性学研究センター 公開日: 2024-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内藤, 葉子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000261

戦争とジェンダー

〈日常〉と〈非日常〉を貫く軍事主義と女性の主体性

講演会趣旨

内藤 葉子

女性学研究センター主任の内藤葉子と申します。本日はたくさんの方にご参加いただきありがとうございます。第26期女性学講演会は、「戦争とジェンダー——〈日常〉と〈非日常〉を貫く軍事主義と女性の主体性」というタイトルで、4つの講演を行います。

戦争は女性たちの〈日常〉に中断をもたらすようにみえます。しかし女性たちの平時の活動や経験は、日常生活に浸透している軍事主義と無関係であったとはいえません。この講演会では、時代や場所や階層の異なる女性たちに注目し、彼女たちが日常生活の軍事化のもとで何を考え行動したのか、戦争という〈非日常〉に直面してどう主体的に行動したのか、また戦争の暴力をどのように受け止め、平和主義へのアクションに向かったのかをジェンダーの視点から問いかけます。戦争と軍事主義、またそれらに関わる女性の主体性について考えることが、4つの報告の共通項となります。

主体、主体性、主体化

戦争とジェンダーというのは大きな括りになりますが、副題にある「主体性」という言葉について少し説明をしておきたいと思います。

「主体」という言葉は、たとえば、親や教師が子どもに向かって「もっと主体的に勉強しなさい」と、日常的に使うこともあるかと思います。私たちはこれを通常〈人間〉に対して使っています。この言葉は翻訳語であって、欧米の言語では、英語だとsubject、ドイツ語ではSubjekt、^{ズブイエクト}「主体性」はsubjectivityやSubjektivitätズブイエクテイヴィテートといえます。語源をたどっていきま

すと、古代ギリシア哲学にまで遡る言葉です。もともとは、アリストテレスのいう^{ヒポケイメノン}hypokeimenonという言葉であって、これがラテン語に翻訳をされて^{スブイェクトウム}subjectumという言葉になります。これは「下に投げ出されてあるもの」という意味であって、そこから「物事の根底にある」という意味になります。少し難しいのですが、哲学的には、「すべての存在者の存在を基礎づけるところのもの」を意味しました。古い時代には、とくに人間に関わる言葉というわけではなかったといえます。

これが〈人間〉に関わってくるのは、デカルトからカントに至る近代哲学においてです。彼らは、存在を下から支えるもの (subjectum) を、人間の理性の認識の働きに見いだそうとしました。これによりsubjectが「主観」という意味を持つようになります (cf. 木田 2000)。その認識の担い手が「主体」です。カントの登場は18世紀後半ですが、彼の哲学は近代リベラリズムにも影響を与えています。そこでは、理性的で合理的で自由な自律的主体が近代政治秩序を構成する、という考え方が現れてきます。近代哲学と近代的政治原理が作用しながら、人間を主体とする考え方が登場してくるのです。ですから、subjectという言葉人間に関わるものとしてとらえるのは、近代以降の思考の産物であるといえるでしょう。

さらに、「主体化 (subjectification/^{スブイェクティヴィーリング}Subjektivierung)」というプロセスには、〈暴力〉が関わっています。この点をはっきりと指摘したのは、20世紀の哲学者ミシェル・フーコーの近代主体批判です。実は、subjectという言葉には、「臣下」や「服従」という意味合いもあります。主体という能動的な響きをもつ言葉と、服従という受動的な響きをもつ言葉は一見矛盾するのですが、この両面性がsubjectという言葉にはあります。

フーコーは、規律に従わせるべく身体に介入する権力に注目し、そうした〈暴力〉を通じた「魂」の改変、人間の存在様式の改変について論じました。ある「主体」になる、「主体化」されるということは、政治的・社会的状況、規範、制度、言説、思想等によって、ある社会的・政治的秩序に適合した存在へと編成されていくこと、またそうした存在たるべく、自らを適合させていく意志や自発性を前提にすること、あるいはそれらを要求されることなのです。子どもに向かって「主体的に勉強しなさい」とい

うとき、それは「教育制度や試験システムに適合した存在になれ」、あるいは、「そうした存在にふさわしい振る舞いを自発的に行え」という要求になっているといえるでしょう。

女性の主体性と軍事主義

主体化と暴力の関わりは、先ほど述べたように、この言葉が近代以降に人間存在と結びつけられるようになってきたこととも関係します。哲学や政治思想から離れて歴史的に見てみますと、近代、とくに19世紀以降は、国民国家形成と住民人口の国民化が進む時期です。ヨーロッパ大陸や植民地において、断続的に起きる戦争ごとにこのプロセスは進んでいきます。それは同時に、誰を国民とし誰を国民としないかという「ナショナリズム」が作動することでもありました。戦争とナショナリズムの暴力性は、主体化のプロセスと無関係ではありません。女性の主体化というのは、この時期にはいまだ完全な「国民」ではなかった女性を国民化することと関連します。もちろん、多面的な影響があつてのことですが、少なくとも近現代史においては戦争が大きく影響しています。

今回の講演会の4つの報告は、時代と場所が異なり、女性たちの置かれた状況も異なるのですが、女性の主体性と軍事主義がどのように関連してくるのかを共通項として意識しながら、準備を進めてまいりました。軍事主義という言葉を用いたのは、戦争が起きていない平時にあつても、軍事主義はその社会を特徴づけているということを通理理解としています。戦争とそれにまつわる事柄のなかで、女性たちがどのように社会的・政治的な秩序に適合させられたのか、またそうした秩序に適合するために女性たちがどのように自発性を発揮していったのか、そして、そうした政治秩序への組み込みや軍事主義を批判的にとらえ、どのように平和構築に向けて行動し始めたのか——4つの報告を通してこうした問いに取り組んでいきたいと思つています。

[参考文献]

木田元『反哲学史』講談社、2000年。